

NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2011.11.1発行 NO.**2**

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

卷頭言

幼児期から児童期にかけての教育の構造等

…幼小の教育を「つながり」としてとらえる

「学級崩壊」がいわれて久しくなり、今や「小1プロブレム」と呼ばれる状況が学級崩壊とは別にとらえられ、問題になっています。小学校との話し合いの中では、卒園するまでに「人の話が聞けるようにしてほしい」「きちんと座っていられる子にしてほしい」ということが要望されます。保育園、幼稚園側では、「年長さんのときはしっかりしていたのに」「小学校の授業のやり方に無理があるのでは」といいます。どうもお互いの連携がスムーズに取れていないのではないかということで、各地で幼小連携が叫ばれています。

■幼小接続の課題

文部科学省の調査によると、都道府県では100%、市町村では99%の自治体が幼小連携は重要と思っているようですが、都道府県77%、市町村80%が未実施のようです。なぜ、必要だと思っているのに実施されていないかというと、「接続関係を具体的にすることがむずかしい」(52%)、「幼少の教育の違いについて十分理解・意識していない」(34%)、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」(23%)のようです。

■ OECD の ECEC 政策理念と戦略

1990年代以降、国際社会では、乳幼児期の発達と学習が初等教育を含むその後の人生の経験や生活の質に極めて重要な意味を持つとの問題意識のもと、乳幼児期への政策的な関心が高まってきています。

そこで、OECD(経済協力開発機構)では、加盟20か国の「ECEC(Early Childhood Education and Care /乳幼児期における教育と養護)」について、2001年に「スターティング・ストロング」において概説し、2006年には「スターティング・ストロング II」により、ECECの成功政策の主要な側面に対する参加各国による対応進展状況を概観しています。その第3章で、「学校との協力で対等な連携」を取りあげています。

■「スターティング・ストロング II」における連携 の調査研究

小学校への移行は一般的に成長発達への刺激となるといわれているのですが、その移行が突然であったり、安易に扱われたりすると、とくに児童にとっては退行や失敗の危険性を帯びることになると警告しています。日本での、1年生になると幼児返りが起きるとか、小1プロブレムという学級が崩壊するような状況は、まさに OECD が指摘することに一致します。

調査研究では、「乳幼児教育及び小学校システムの 両者においてより統一された学習方法が採用されるべ きであり、また就学児童が直面する移行課題に注目す べきだ」と提案されています。

統一された方法の探究は、国によって異なった政策 選択をもたらしてきました。フランス語圏や英語圏で は「学校への準備」方法を採用し、乳幼児の認知発達、 児童が教室経験の結果として発達させるという、一連 の知識やスキル、態度の獲得に焦点を充てています。 そのために、乳幼児及び小学校教育の内容と教授方法 がより密接に連携し、教師中心及びアカデミックな方 法を一般的に支持しています。しかし、この方法に内 在する欠点は、児童の心理と自然学習方策にあまり相 応しくないプログラムと方法を使っていることだと警 告しています。一方、社会教育方法の伝統を継承して いる国々(北欧及び中央ヨーロッパ各国)では、幼児 施設は人生のための幅広い準備、生涯学習の基本段階 と見なされています。中心は児童の現在の発達課題及 び関心を支えることに置かれているのです。児童への かかわりは養護、陶冶、教育を包含するものとしてい ます。そして、小学校や放課後サービスとの連携はさ まざまな仕組みを通して維持され、幼児施設教授方法 は少なくとも小学校の低学年に影響を与えるべきであ るという広い認識があります。

■円滑な接続のあり方に関する調査研究

2010年、文科省に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」が発足し、11月に報告「幼児期から児童期にかけての教育の構造等」が出されました(『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』)。副題に「幼小の教育を『つながり』としてとらえる」とあるように、幼小連携のあり方について、子どもの発達をきちんとつないでいこうという方向性が示されました。

■報告「幼児期から児童期にかけての教育の構造等」 1 教育の目的・目標

OECDの提案のように、「教育の目的の共通性」を 提案しています。それを、フランス語圏や英語圏で今 まで取りあげられてきた学校準備型ではなく、「人格 の完成」を目的に、その内容として「幼児期を含め、 個人として、社会の構成員として、あるべき理想の姿 を目指す」としています。

これは、中央ヨーロッパや北欧に見られるように、 幼児教育を人生のための幅広い準備、生涯学習の基本 段階と見なす方向を日本でもとることとしているので す。そして、この目的を幼小の教育の中で連続性・一 貫性を持たせるために、「①義務教育及びその後の教 育の基礎を培う。②幼児の健やかな成長のために適当 な環境を与えて発達を助長」とし、小学校では「義務 教育のうち基礎的なものを施す」としています。さら に、「幼小の教育の目標」を「学びの基礎力の育成」と 位置づけました。

2 教育課程

「幼児期と児童期の教育には、子どもの発達の段階の違いに起因する教育課程の構成原理や指導方法等の違いがある。ただし、こうした違いの理解・実践は目的・目標が連続性・一貫性をもって構成されているとの前提に立って行われなければならない」のです。

そのために、「幼児期における教育要領等に基づく 教育は、児童期の学習指導要領に基づく教育の内容の 深さや広がりを十分理解した上で行われること」とし、 それは「今の学びがどのように育っていくのかを見通 した教育」をすべきであるとしています。

そして、「こうした取組は、幼小の教育において、一 方が他方に合わせるということではないことに留意す ることが必要」であるといっています。決して、幼児 教育が、小学校以降の教育に合わせようとする教育で はないことを確認しています。

3 学びの基礎力の育成

「幼児期の終わりから児童期(低学年)」にかけて、以下の「三つの自立」を示しています。幼児期から小学校低学年までで分けているのは、世界では幼児教育の対象を、脳の臨界期といわれている8歳を区切りとしていることを踏まえています。



M子の悩み

年長組の女児のM子は、こぼれた牛乳に肌が触れるだけで、炎症が起きてしまうほど、重いアレルギー体質で、家庭と綿密に情報交換をしながら、保育園の食事にストレスのない環境を用意してきました。

「ニューズレター」No.18で少し紹介しましたが、昨年度の年長児が、庭に掘った穴が段々大きくなって、ひょっとしてこのまま掘ったらアメリカまで行けるのではと思いはじめました。「ある日、穴がポカリと開いて、向こうからアメリカ人が顔を出したら、挨拶はどうすればいいの?」そんなことが話題なったときは、真剣に英会話の本を買いたいと親に頼んだ子どもたち

です。穴が深くなってアメリカ行きが真実味を帯びて くると、今度はその深い穴からの帰り方も心配になっ て、運動が苦手で竹のぼりに寄りつかなかった子まで 練習するようになったほどです。

ところが、実際ボストンから帰ってきた子がいて、 ものすごく長い時間飛行機に乗っていたことや、親の 仕事に付いてバリ島に行った子が、7時間もかかった 話をしてくれて、アメリカの遠さを地図で確かめたの でした。また、図鑑で調べた地球の底には、マグマが あって通れないこともわかるのです。

春からはじめて夏に中断したアメリカ行きでしたが、

学びの自立=自分にとって興味・関心、価値があると感じられる活動を自ら進んで行うとともに、人の話をよく聞いて、それを参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現すること。

生活上の自立=生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわり、自 らよりよい生活を創り出していくこと。

精神的な自立=自分のよさや可能性に気付き、意欲 や自信をもつことによって、現在及び将来における自 分自身の在り方や夢や希望をもち、前向きに生活して いくこと。

一方、「児童期及びそれ以降の時期」の学びとして、「学力の三つの要素」(基礎的な知識・技能、課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度)の必要性をあげています。

4 教育活動

以上のような学びの基礎を培うために、幼児期では「学びの芽生え」を大切にし、児童期では「自覚的な学び」を大切にします。ただし、「幼児期から児童期にかけては円滑な移行ができるよう、以下の取組が必要」とし、「幼児期から児童期の子どもの特性に応じた教育の展開」であり、「人やものとの直接的・具体的な対象とのかかわりを通して、より抽象的な概念等(物事の法則性等)を認識していく」としています。

「人とのかかわり」とは、「自分とのかかわり」と

「他の人・集団とのかかわり」であり、幼児期の終わりとしての留意点として、「幼児の興味・関心や生活、協同性の育ち等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いをつけたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進めることが必要」としています。

「ものとのかかわり」では、「自然とのかかわり」と
「身の回りのものとのかかわり」があげられています。
幼児期の終わりの留意点として、「幼児の興味・関心や
生活等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題について、発達の個人差に十分配慮しつつ、これまでの生活や体験の中で感得した法則性、言葉や文字、数量的な関係などを組み合わせて課題を解決したり、場面に応じて適切に使ったりすることについて、クラスやグループみんなで経験できる活動を計画的に進めることが必要」としています。

今回の報告書を受けて、今後、具体的な取り組みが 提案されてくるでしょうし、これが小学校を含めた幼 児教育以降の教育施設にも周知されていくことでしょ う。幼小の取り組みに際し、この報告書の内容が共通 認識として、幼小の話し合いや、幼小連携の提案がさ れていってほしいと思っています。

(藤森平司●東京・新宿せいが保育園園長)



秋になって再燃したのが、掘った穴から生まれた残土でつくる富士山と、諦めきれないアメリカ行きでした。アメリカにみんなで行きたい。高まるみんなの想いに、悩んだのがM子でした。M子の心配は食事のこと。自分が食べられるものがないのではないか(今度の大地震の避難所の食事の様子をニュースで観ても、一番心配だったのはそのことでした)、だからアメリカには

行けない。でも、みんなにそれをいったらがっかりするのではないか。悩んで掛けたのは国際電話。中国に単身赴任しているお父さんに、相談したのです。お父さんは、悩みながらもみんなには話さなければならないと思っているM子の気持ちを丁寧に聞いてくれて、後押ししてくれたのでした。

そして翌日。M子は思い切って、アメリカに一緒にいけないことをみんなに話すのですが、なんと、「Mの分までお弁当を持って行くから一緒に行こう」とみんながいってくれたのでした。その翌日、お母さんから、M子は家に帰ってから「みんなに話してよかった」と涙をこぼしながら報告してくれたことを聞きました。

普段からM子のことをみんながわかり、ともに生活 してきたことが力となって育っているのです。

(**鈴木眞廣●**千葉·和光保育園園長)



保育の質の向上を願って

2学期、全国の多くの私立幼稚園では来年度の入園 願書の受付があります。また、それに伴い入園説明会 や見学会を行う園も多く見られます。保護者がどのよ うな基準で園を選んでいるかというと本当にさまざま ですが、「給食があるか」「送迎バスは家の近くまで来 てくれるか」「預かり保育は何時まであるか」という保 護者の利便性で選んでいたり、「制服がかわいい」「近 所の○○ちゃんが行くから」という情緒的な選び方や、 現在の人間関係を重視した選び方もあります。

一方、保育の内容や質を重視する家庭もありますが、 そのとき、何を持って保育の質を評価するかについて はさまざまな考え方や誤解があります。例えば、マス コミに取あげられた○○式といった方法やフラッシュ カードを使って文字、数字を繰り返すことにより教え 込むような方法を取り入れている園を選ぶ家庭もあり ます。「○○できる」ということは、ある意味わかりや すく、一見すると (小学校の中学年頃までは) 賢そう に見えますから、一部の保護者が飛びついたりするわ けです。幼児期が子どもの生活とかけ離れた知識や技 能を一方的に教えて身に付ける時期でなく、保育者や 友だちとの関係に支えられて、主体性を十分に発揮し ながら活動を展開する過程で幸せな人生(=個々のよ さや持ち味を十分にいかした人生)を生きるための基 礎を培う時期であることは、日々子どもの育ちを目の 当たりにしている私たちにはわかるのですが、保護者 や社会には少々わかりにくいものだと思います。

私の園では、入園説明会で前記のようなこととともに幼児教育は環境を通して行うこと、自己肯定感の育ちが大切なこと、子どもは生まれながらに自ら学ぶ存在であること等を説明しています。また、はじめての集団生活で保護者が心配されることの多いけんかとけがのことについても、けんかは、子どもの自己発揮や自己主張であったりすることが多いこと、けんかをすることで相手の気持ちに気づくようになること、自分を客観的に見る(=自分自身を知る)貴重な経験になったりすること、けがは、重大な事故が起こらないように細心の注意を払いつつも、小さなけがを繰り返しながら大きなけがをしないように育っていくということを伝えるようにしています(入園前に具体的かつ

丁寧に説明するようになってからは、保護者と園との 誤解やトラブルはほとんどなくなりました)。

7月末、国の子ども・子育で新システムについての中間とりまとめが発表され、幼保一体化が進んでいくことが予想されますが、一体化が単なる手段であり目的は保育の質の向上だとするならば、その質の評価を保護者や地域、社会と共有する必要があるように思います。10年、20年後に日本の社会が保育を見る目が変化し、保育という営みがもつ高い価値を理解するとき、はじめて子どもを取り巻く環境が向上するのではないでしょうか。そのためには、すべての保育にかかわる施設や保育者が「共通の言語」となる映像や写真、エピソードなども活用し、ともに保護者や地域に発信をしていくことが重要であると思います。

(安達 譲●大阪・せんりひじり幼稚園園長)

編集後記

◎「つながり」 ― 編集後記にかえて

藤森代表は巻頭言で「(保) 幼小連携の報告」に対してコメントされています。確かに小学校教育との連携は避けて通れない大事なテーマですが、単に"教育のつながり"といわれても、お互いがお互いのことを知らず、どのような踏み出しが必要なのか、まったくわからないというのが現実だと思います。

安達先生の報告にあるように、保護者の中には多様な子ども観(ニーズ)が存在します。"つながり"以前に何が乳幼児期の保育(教育)なのか、そのコンセンサスがまったくといってよいほど、とれていない現実と向き合わないといけないと思います。一方、鈴木委員長の連載は興味深い示唆を与えてくれます。園庭にできた1つの穴から壮大な探求の旅が進展していくドラマです。これこそまさしく、保育の"つながり"のモデルだと感じます。「子どもの思い」と「保育者の受けとめ」の物語がどんどん発展していきます。

私たちは『保幼小連携』を机に向かって概念でとらえようとする前に、つながりのある保育実践を日々行うことにより、小学校関係者との"つながり"について具体性のある話し合いができるのではないかと思います。

(片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長)

❖問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会 〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10 TEL 03-3865-3880/FAX 03-3865-3879 URL http://www.zenshihoren.or.jp E-mail ans@zenshihoren.or.jp